掘立から礎へ

中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開

‘HORITATE’ CHANGED INTO ‘ISHIZUE’

Making of the Japanese early modern vernacular house
with the framework of ‘Munamochi-bashira’

土本俊和*, 遠藤由樹**

Toshikazu TSUCHIMOTO and Yoshiki ENDO

This paper provides the diachronic view of the Japanese vernacular house from the late medieval to the early modern period. ‘Hottate-bashira’ is a post with fixed end struck into ground and ‘Munamochi-bashira’ is a post which supports a ridge beam called ‘Munagi’. The archetype of the vernacular house had ‘Hottate-bashira’ and ‘Munamochi-bashira’; afterwards, changed into the house with posts on stone bases called ‘Ishizue’. It is concluded that the major prototype of Japanese early modern vernacular house has three posts in span direction with fixed end struck into ground and the middle post supports the ridge beam.

keywords : Udatsu, Hottate-bashira, Munamochi-bashira, base, Odachi-structure, Sasu-structure

ウダツ、掘立柱、棟持柱、礎石、オダチ組、扱首組

1. 研究の目的

民家の変容を考える上で貴重な指摘を北山型に関する説明にて永井規男は提示した*¹⁾。永井によると、北山型で最も古い石田家住宅は、「四間の上屋梁の中央に棟束をたて、その両脇に1間はなして母屋束をたて、棟木の中央からつなぎ梁を水平にわたして母屋束の頭につないで固める方式をとっている。棟束を「オダチ」、つなぎ梁を「とりい」と言っているので「おだち・とりい」組と呼ぶ」(図1-1)。これとはやや異なった古い小屋組の形式をもつ木戸家住宅の場合(図1-2)、「「おだち・とりい」組みにおけるつなぎ梁の位置まで内部の3本の柱がたち上り、それらが2間の梁を支えてその上に短い棟束をたてるという方式をとっている。ちょうど「おだち・とりい」組みの小屋束と下の柱を一本にしたような形になる」。そして、「「おだち・とりい」組みにおける母屋束が、この構造形式が示すように柱につながる要素をもつのであれば、さらに棟束もその可能性があらうと思われる」と推した。「すなわち、より古い形式として中柱が棟持柱となって直接棟木を支承する構造が存在したと推定できるのである」。さらに、「棟持柱を中心として梁行に対称形に1間々隔で柱をたてるとすれば、2間または4間という梁行間が定まってくる。初期本百姓の家構が4間という梁間をとっていたのは、棟持柱構造を北山型が比較的近い祖型としてもっていたからである

う」とした。さらにまた、「近世に入って一般に家屋規模が大きくなってくると、それに応じて家のかたちが高くなり、棟持柱構造にすると相当に長い柱が必要になる。これを避けて、できるだけ短い柱で済むように、まず木戸家のような構造が考えられ、ついで「おだち・とりい」組みへと発展したのではないかと推定される」とした。以上の指摘をまとめると以下になる。第一、「おだち・とりい」組みの典型とはやや異なる木戸家から推すと、より古い形式として中柱が棟持柱となって直接棟木を支承する構造が存在する。第二、この構造では2間または4間という梁行が定まってくる。第三、規模が大きくなると、棟持柱構造では相当に長い柱が要るので、「おだち・とりい」組みへと発展した。

棟持柱構造を祖型とみなすこの論点を本研究は棟持柱祖型論と命名する。この論点は、北山型に限らず、京都の町屋*²⁾と茅葺民家に当てはまる*³⁾。以上を踏まえ、本論は棟持柱祖型論の妥当性がどの程度普遍的であるのかを問う。

図1-1 石田家住宅断面模式図

図1-2 木戸家住宅断面模式図

* 信州大学工学部社会開発工学科 助教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Shinshu University, Dr. Eng.

** 信州大学工学部社会開発工学科 大学院生

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Shinshu University

2、用語としての棟持柱

まず、棟持柱という言葉の用例を考察する。

2-1 ムナモチバシラ、ムナバシラ、ムナハシラヤ

・むなもちばしら：『建築大辞典』に、「①棟木を直接に支えている柱の総称。(中略)②特に神明造りの社殿において妻側中央の側柱の外側に立つ独立柱で、棟木を支えているもの。(中略)③与次郎組などの小屋組において、直接に棟木を受ける柱」とある*4)。このように、棟持柱は、その用例が多様だが、以下にみるように過去においてムナモチバシラと呼ばれていたわけではない。

・ムナバシラ：『日葡辞書』に、「Muna-baxira. ムナバシラ(棟柱) 家の棟木をその上に据える支柱、または、柱」とある*5)。また『日本民家語彙解説辞典』に、「明治初年(1880頃)の東京の下町について記した長谷川時雨の「旧聞日本橋」のなかに見える用語。彼女の生家の「三階の棟柱」とあるから、三階まで通して棟を支持している太柱を指しているらしい」とある*6)。実際、江戸を描いた絵画資料に棟持柱をもつ町屋がみえる*7)。

・ムナハシラヤ：15世紀末から16世紀前半にかけて成立したと推定される「近江菅浦棟別掟」には「むなはしらや七十文之事」とある。これにより、「むなはしらや」という建物が中世に実在したといえる*8)。また川島宙次は、「近江では納屋に棟持柱が建ったつくりがある。いずれも小規模な建物で、これを「むなはしらや」と呼ぶ」*9)と指摘した。

2-2 ウダツ、ウダチ、ウダツヤ、オダチ、オダツ

・ウダツ、ウダチ：石原憲治は、「この家(中村有国氏の住家・括弧内筆者)の構造を見ると、中央の大黒柱が地上から一本の柱で棟木まで通っていて、直接にこれを支えていることである。私はこの柱を仮に「棟持柱」と称しておく。この棟持柱のことを八代郡御代咲村で調べた例によると、「ウダツ」または「ウダチ」と称している」と記し、ウダツとウダチの実例を示した*10)。そして石原は、「わが国の民家のウダチは本来棟持柱の名称であったもので、現在、信州・武州・上州の山地の小屋造りにわずかに残存しているのはこれを語っているものであろう」とした*11)。『建築大事典』には、「うだつ〔卯立、卯建、桧〕①『倭名抄』(930年代)によれば梁の上の柱を指すとあり、妻側の棟束を指すものと考えられる。『日本書紀』では「うだち」と発音する。②前者に由来して妻壁。③室町時代の民家、特に町屋において妻壁を屋根より高く突き出して小屋根を付けたもの。(中略)④近世民家において建物の両側に設けられた小屋根付きの袖壁。(中略)⑤近世の山梨県・長野県の農家において妻壁にある棟持柱。(中略)⑥(略)」とある*12)。

・ウダツヤ：享保18年(1733)「福沢村家数書上帳」に、「うだつや」、「うたつや」、「有立屋」といった文字がみえる*13)。石原憲治は信州の梓村(現梓川村)の原重治氏宅の二棟のウダツ屋を記録した。このウダツ屋について石原は、「今でも此の様なウダツ屋を隠居などの住居に使用して居るものも稀にある様であるが、一般に是は一段と下等な建物とされて居るので人前ではそういう事をあまり口にしない様に見受けられる」と記した*14)。『建築大事典』には、「①静岡・山梨・長野・千葉・宮城各県地方の民家において梁がなく、棟を支える柱が地面にまで通っているも

の。主として小住宅または付属小屋の構造として使われた。『鼠の夜嘶』に桧小屋の文字が現れているのを見ると、近世初期の近畿地方の町屋でも小住宅に使われていたことが知られる。新潟県北魚沼郡地方では「おだつ小屋」という。②室町末期以後の近畿地方、特に奈良県および大阪府平野部の民家において、建物の両側に卯立を掲げている民家の総称。この形式は役家または本百姓、家主層以上の住宅にしか社会的には許されていなかった。明治以後この制は崩れていった」とある*15)。

・オダチ、オダツ：『居住習俗語彙』に、「オタチバシラ 伊豆の南崎村で、上り端の二間とニヤ即ち土間との境に立つ柱、他の土地でいふ大黒柱である。建て前の日には此柱に蓑と笠をつるし、且つ鏡扇銭を飾つたノサを結はへ付ける。又オダツ柱とも呼んで居るから、小屋をウダツと謂ふのと一つの語であろう」*16)とある。また『建築大事典』に、「おだち 卯立の転訛。京都府丹波地方の草葺き民家において棟木を支える小屋束をいう」とある*17)。すなわち、オダチやオダツはウダツの転訛である。

2-3 タテノボセ、タテノボシ

川島宙次は、「京都近郊の西山山麓には、片入母屋造りが分布していて、裏の切妻側から見ると棟持柱が地上から棟木まで達しているのが見える。土地の言葉でこれを「建て登せ」という」と記す*18)。信州では、棟木を通し柱で直接支える形式の民家を「タテノボセ」構造といい、とくに飯山地方の山間部で積雪量が多い地域にみられる*19)。『建築大事典』に、「たてのぼし〔建登し〕主として京都府乙訓郡地方の民家に見られる妻壁の構造の一。この地方の草葺き民家では、一方を入母屋、他方を妻壁とするのが多く、これは妻壁側で行われる。小屋梁がなく、土台石から直立する柱が直接に棟木および母屋桁を受ける」とある*20)。

2-4 中柱構造とアナヤ

『日本民家語彙解説辞典』に、「ナカバシラコウゾウ 中柱構造 中央に立つ1本の柱で棟を支え、棟が短かく、その棟に三組の太い垂木を掛け渡して屋根の構造材とする構法のこと。沖縄県宮古列島に見られる構造形式である」*21)とある。また、宮沢智士は、沖縄地方の民家について、掘立小屋である「アナヤで最も重要な部材は中柱である」とし、「中柱は建物の中央にたつ掘立柱で、八重山地方では、上方が枝分かれしたY字形の股柱を用い、棟木を支える」と記す*22)。このように中柱が掘立棟持柱になる場合がある。

2-5 又ウダツ、ムナギモタシ

『日本農民建築 第五輯』の「長野県」の章にて石原憲治はケミヤ*23)を、「是はウダツ造りであるが此の辺ではウダツとは切妻屋根造り即ち両流れ屋根の意味に用ゐて居る。又従つて一般に下等な作りの意味に用ゐて居る」とした上で、信州の「南安曇郡安曇村の山中鈴蘭小屋付近で畑中に建つて居た掘立小屋に就て調べた所によると土地の人達は是を又小屋と呼んで居る。是は棟柱の上端が又木になつて居るものを建てて是に棟木を支えさせて居る。此の柱のことを又ウダツとも言ふて居った。此の掘立小屋の外観も大體前のケミヤと同様であるが是は丸柱の掘建て最も単純な形である。是は側柱が四尺位、棟柱が七尺位の極めて低いものであった」と記録した*24)。また、『居住習俗語彙』には、「ムナギモタシ 吉野の野迫川村などで、山小屋の棟木を支へる木で

ある。上端を二股にするものとなつて居る」とある*25)。このように、上端を二股にして棟木を支承する棟持柱があった。

2-6 古代のウダツ

『和名類聚抄』には、「梁上楹謂 税」とあり、「和名字太知」と訓じられている*26)。また、石原憲治によると、「わが国に奈良朝以前から中国伝来の瓦葺き大寺院に用いられた棟木を支える太い棟束が、奈良その他の大寺院に用いられたが、これを中国の文字「税」（セツと音読された）を当てていたが、日本にはこのような構造はまだ用いられなかったので、在来の大和言葉で読ませたの『古事記』にも「字立」または「字太知」と書かれている。（中略）以上により、わが国山村の民俗にあった「ウダツ」の棟持柱と中国伝来の「税」は異なる起源を持つことが明らかで、中国伝来の「税」をわが国の古語「ウダツ」と読ませたものと解すべきであろう」と記した*27)。さらに石原は、「中国より伝来の「束」の意にウダツの名称を使用しているのを私は五年前、沖縄本島の北方の山村で見たが、この地方ではすべての小屋束を「ウダツ」と呼んでいた。わが国の本州全島でほとんど死語となっているウダツという名称が、沖縄で日用語として使われていた」と記した*28)。以上のごとく、中国の文字「税」は棟束の意味として古代日本へ伝来し、ウダツと訓じられたが、わが国でウダツは棟持柱と考えられ、石原による調査時には、信州などの地方の小屋および民家にみられる棟持柱と、沖縄本島でみられる小屋束との意味の二つがあった。つまり、ウダツは棟束や棟持柱であって、これらはともに棟木を支える垂直材である。

他方、『常陸国風土記』は、「標の税」との文言にシルシのツエと訓じている*29)。これは「税」が土地の境界を意味する用例と理解できる。掘立棟持柱であったウダツは柱の脚部が地面に埋まっている。それゆえに、この柱が「シルシのツエ」として土地の境界をも意味する場合もあったといえるだろう*30)。

2-7 屋境としてのウダツ

以上のごとく、棟持柱を指す用語は種々あり、ウダツもその一例であった。広くとればウダツは棟木を支える材であった。またウダツは、屋根の妻壁の上にみえる屋境としても解釈されており、室町時代以後からこれを指すようになったとする書誌も多い*31)。しかし、ウダツは本当に室町時代から屋境の小屋根を指していたのだろうか。屋境としてのウダツの発生について述べた伊藤鄭爾の説明をみると、「卯建は、防火のための装置と考えられている」点を疑問として、「屋根板の端の保護が第一の目的であったと考えられる」としている*32)。その根拠として、『大乘院寺社雑事記』文明19年7月19日条、『同』明応9年2月10日条、『多聞院日記』元龜3年5月16日条、『享祿天文之記』永祿7年条を引きながら、「板屋根の端はかんたんにきりとられるほどであったし、風の吹上げにはもつとも弱かった。ここにおいて妻側の小屋束を一段と高くあげ高塀を廻すと、つまり卯建をあげると二つの意味で好都合である」とした。そして、「ひとつは屋根の端の固定ができる。他のひとつは高塀によって屋根への風当りを弱くすることができる」として、その機能を解釈した。しかし、これらの文献史料は、板屋根の端の弱さを示すものの、ウダツという用語がこの材を室町時代に指していたことを示さない。

以上より町屋においても、「妻側の小屋束を一段と高くあげ高

塀を廻す」ときの「小屋束」そのものがウダツではなかったかと考えられる。ただ、京都の町屋の場合、「小屋束」との呼称は的確ではない。なぜなら、洛中洛外図屏風（町田本、上杉本）が描くように、京都の町屋は軸部と小屋組に分かれていないので、棟木を支える材は、小屋組のなかにある束ではなく、地面からたち上がる棟持柱であったからである。よって、室町時代にウダツは、町屋においても、屋根の妻壁の上にある屋境ではなく、棟持柱そのものを指していたと考えられる。すなわち、先にみたウダツの一連の用例から推して、ウダツは室町時代の町屋においても棟持柱そのものを指していたと考える方が的確であろう。

3、断面にみる棟持柱

3-1 掘立と礎石

柱の脚部を支える構法には掘立と礎^{ほりたて いしう}がある。『日葡辞書』には、「Foritate. ホリタテ（掘立）木の柱を地中にさしこんで建築するやり方。Foritateno ie.（掘立の家）上述のようにして建てられた家」*33)とある。また、「Ixizuye. イシズエ（礎）木造の建物の下に据える礎石。Ixizueno iye.（礎の家）この基礎の上に土台をおいた家。Ixizueuo suru. l, ixiuo suyuru.（礎をする。または、石を据ゆる）建物の土台石を据える」*34)とある。このように、柱の脚部の支え方に応じて、建物を「掘立の家」と「礎の家」に大別することができる。脚部が掘立である棟持柱は伊勢神宮にみられ、脚部が礎である棟持柱は仁科神明宮にみられる。掘立は礎より古い形式だから、建物は掘立から礎へと移行していった。その変わり方には二通りある。

その第一は、建物がたてかえられたとき、掘立から礎へ変わるものである。つまり、柱の脚部が掘立である建物のすべてをとりこわして、柱の脚部が礎である建物を新たにたてるケースである。その具体例を宮澤智士「近世民家の地域的特色」（1983年）*35)を通じて捕捉する。宮澤は近世民家の前身建物であった可能性の高い考古学的発掘資料を数点示した。これらの資料は掘立から礎へ建物がたてかえられる過程を示唆する。まず、秋田県鈴木家住宅と岩手県旧後藤家住宅では、現住宅よりも規模のはるかに小さい前身建物跡が発見された。この他、神奈川県伊藤家住宅と京都府渡辺家住宅では、規模や柱配列などに現住宅と類似点のある前身建物跡が発見された。とくに後者の場合、前身建物跡と現住宅にいくつかの類似点がある。しかし、前者も後者ともに、掘立柱構造であった前身建物を取りこわした後に、礎石建の現住宅がたてられたとみなすのが前身建物と現住宅との関係に対する自然な理解であろう。

これに対して第二は、建物がたてかえられなくても掘立から礎へと柱の脚部が変わるものである。その具体例を藤島亥治郎「江戸時代民家の文献的研究」（1954年）*36)を通じて捕捉する。藤島は信州南佐久地方の野沢町大字取手町で掘立屋を実見したという。その建物は、「床高1尺前後の切妻板葺屋で、亦200年前の建前と思われるが、前方の本柱数本が現に地中に掘立てられてあり、礎を有する柱については近年柱の腐朽に伴い挿入したとの家人の言である。なおこの附近にはこの様な掘立屋が数戸ある由である」。そして藤島は、「床高の低い家で礎石のある家も、柱の腐朽に伴い後から礎を挿入したので、本来は掘立屋であつた家は全

国に案外多いのではなかろうか」と推した。この指摘のなかで本論が注目したいのは、柱の脚部が掘立から礎へ移るに際して、建物をまるごとたてかえなくても、柱の脚部だけをとりかえればよい場合があったという点である。

すなわち、掘立から礎への移行過程は、建物を全部たてかえる場合ばかりではなく、ただ単に柱の脚部をとりかえていくだけの場合もみられた。とりわけ柱の脚部を掘立から礎へと個々に替えていく場合、その建物が構造的に安定である限り、上部の架構をとりかえる必要がない。掘立から礎へのこの種の漸進的な変容は、明治以降、在来の和小屋と外来の洋小屋の二者に溝があったのと対照的である。和小屋は洋小屋へ連続的に移り得ない。しかし、掘立は礎へ徐々に移り得た。とはいえ、柱の脚部を掘立から礎に一つ一つかえていくとき、建物はどこまで構造的に安定でいられるのか。この点を、梁行2間と梁行4間の掘立棟持柱構造に即して検討する。

そもそも、掘立柱が自立できるのは、その脚部が地面との接点で固定端とみなされるからである(図2)。この柱から成る建物の場合、貫などの水平材は構造上さほど重要でなかった^{*37)}。では、現実にはどの程度の水平材が必要なのか。まず、梁行2間の掘立棟持柱構造を構造図にすると図3・1になる。部材数が5、支点が固定端で3、節点数が6であるから、二次不静定で安定である^{*38)}。つまり、この単純な構造において、柱の脚部が固定端であるかぎり、水平材が必要でない。このことは、梁行方向ばかりでなく、桁行方向でも同じである。たとえば、中世後期の京都を描いた洛中洛外図屏風(町田本)は、桁のない建物を描写する^{*39)}。このことを指摘した伊藤鄭爾は、室町時代の町屋について、「町田家本洛中洛外図屏風によると棟持柱をたてている(第42図)」。しかしこの構造には不審な点も多く、第一桁がない。出入口が櫓式になっているので或いは実際に桁がなかったのであろうか^{*40)}と述べた(第42図が図4)。これまでの考察から推すと、桁がないこの構造は掘立柱構造である限り合理的であるから、当該期京都の町屋に桁が実際になかった可能性が高い。つぎに、梁行4間の掘立棟持柱構造を構造図にすると図5・1になる。5本の掘立柱が固定端とみなし得るので、四次不静定で安定である。

そして、柱の脚部が礎にかわり、そのすべてが回転端となった場合、その構造は不安定になる。しかし、脚部を固定端とみなし得る柱が一本でも残っているならば、たとえば図3・2と図5・2のようにその構造は静定で安定となる。このように、柱の脚部を掘立から礎にかえていく場合、その脚部がすべて礎になれば、その構造体は不安定になる。しかし、1ヶ所でも柱の脚部が固定端とみなし得る限り、その構造は安定である(図3・2・図5・2)。

この解釈から想起されるのは江川家住宅に残され生柱である。すなわち、「玄関背後の土間境にたつ生柱は掘立柱であり、これは

図2 『建築大辞典』所載の固定端

は前身建物のものであって、現住宅の建築にあたって、記念としてのこされたものである。発掘調査の結果、生柱のほか四本の掘立柱の柱根を発見している^{*41)}。このようにこの住宅の前身建物は掘立

図3-1 梁行2間で柱のすべてが掘立柱の構造図(安定・二次静定)

図3-2 梁行2間で中柱のみが掘立柱の構造図(安定・静定)

図4 「建設中の洛中町屋」(『中世住居史』第42図)

図5-1 梁行4間ですべての柱の掘立柱の構造図(安定・四次不静定)

図5-2 梁行4間で中柱のみが掘立柱の構造図(安定・静定)

柱構造で、掘立柱である生柱を一本だけ残したのは家の継続性を記念するものと理解される。さらに推せば、この掘立柱は、もともとはすべてが掘立であった柱の脚部を徐々に礎へとかえていった過程で残った最後の柱であったかもしれない。とくに発掘調査で掘立柱の柱根ばかりでなく礎石や石敷も発見されたこの住宅の場合、柱の脚部が掘立から礎へかえられていく過程で、掘立と礎が混じり、最後にこの生柱が唯一の掘立柱として残された可能性がある。

先述のように、掘立柱構造の場合、梁行の柱の脚部が一つでも固定端であるかぎり、その他の柱の脚部が回転端となっても、その骨組みは静定で安定である。この意味で、掘立柱の脚部に礎を挿入するという、藤島が聞き取った作業は、構造的にいても合理的である。すなわち、もともとは固定端であった柱の脚部を一つ一つ回転端に変更するこの作業は、脚部が固定端となる柱を掘立柱として一つ残すかぎり、構造物が不安定になる事態をまねかない。ちなみに『日葡辞書』には、「Foritate, tçuru, eta. ホリタテ、ツル、テタ(掘り立て、つる、てた) 柱を地中にさしこんで建築する」とあるに加えて、「Foritauoxi, su, oita. ホリタラシ、ス、イタ(掘り倒し、す、いた) 穴を掘って、あるいは、下の方を掘って、木とか家などを倒す」とある^{*42)}。特に後者が掘立柱構造の家に対して用いられるなら、固定端とみなされる柱の脚部を回転端にかえていく作業が想起される。その作業をすべての柱についてすませば、建物は不安定になって倒れるだろう。

3-2 棟木を支える材と棟木

伊勢神宮や仁科神明宮の建物には棟木が二本ある。とくに仁科神明宮本殿は、文献史料から二本の棟木が確認できる。すなわち、延宝4年(1676)の造営書に「式本、同四間巻尺、巻尺三寸角上棟木」とある*43)。棟木が二本の建物は民家にもみられる。『山梨県の民家』(1982年)*44)を通じてその実例を捕捉する。ここには、民家に関する文献資料と図面資料と写真資料がある。ここから抽出される156棟のなかで37棟に棟持柱がもちいられている。そのうち草葺は35棟である。さらにこのうち断面図があるものは24棟である。これらを分類する。まず、棟木が二本か一本か、つぎに、棟木が一本の場合、棟持柱がその棟木を直接支えるか、それとも直接支えていないか、で分ける。これにより、24棟は三つに分かれる。すなわち、棟木が二つ存在する棟持柱構造の民家のグループ(表1の18点・図6)、棟木が一つで棟持柱が棟木を直接支える構造の民家のグループ(表2の1点・図7)、棟木が一つで棟持柱が棟木を直接支えない構造の民家のグループ(表2の5点・図8)である。

ここに分類した民家は、棟持柱構造であるが、柱の脚部が礎であった。とはいえ、そもそも柱の脚部が掘立から展開してきたこの構造の場合、柱そのものが自立するため、水平材がなくてもよいので、上屋梁がなくてもよい。上屋梁を必要としない掘立柱構造の場合、軸部と小屋組に分ける必要がないばかりか、上屋と下屋に分ける必要もない。つまり、上屋梁を用いない掘立柱構造の場合、軸部と小屋組の関係や上屋と下屋の関係を考えなくてもよい。このとき、上屋梁がない掘立柱構造とは掘立の棟持柱構造にほかならない。対して礎石建の場合、『山梨県の民家』にみられる棟持柱構造もあるが、これらは少数派である。その多数派は、軸部と小屋組を上屋梁が分かち、上屋と下屋を上屋柱が分かち形である。すなわち、一本の上屋梁と二本の上屋柱に囲われる部分が軸部であるとともに上屋である。

その上に小屋組がのり、その両脇に下屋がつく。柱は礎の上にのるから、その脚部は回転端となるが、上屋柱と上屋梁の接合部は剛節とみなされるから、この構造は安定である。

以上を踏まえ、いま礎石建で上屋梁を持つ近世民家のうち茅葺民家と考えた場合、その小屋組にはオダチ組と扱首組がある。上屋梁の中央にオダチがのって棟木を直接支えるオダチ組の場合、図7との関連がみえる。対して扱首組の場合、上屋梁の中央に棟束がのる事例が散見される。この棟束は二本の扱首の交差した部分の下でとまっているので、棟束が棟木を直接支えていない*45)。この場合、図8との関連がみえる。

表1 棟木が二本の棟持柱構造の民家

	家名	建築年代	備考
1	上野正氏宅	17世紀前期	
2	広瀬保旧宅	17世紀後期	
3	野村善次郎氏宅	17世紀末期	
4	古屋義磨氏宅	18世紀初期	
5	広瀬勝氏宅	18世紀前期	
6	風間明太郎氏宅	19世紀前期	
7	市川文雄氏宅	18世紀前期	
8	坂本勇氏宅	18世紀中期	
9	米山金替氏宅	18世紀後期	
10	若月光都氏宅	18世紀後期	
11	西川古寿氏宅	18世紀後期	
12	高野正根氏宅	18世紀後期	
13	池永美千代氏宅	18世紀後期	
14	前島映滋氏宅	18世紀後期	
15	小泉国晴氏宅	18世紀後期	
16	竹井義明氏宅	18世紀末期	
17	楠立雄氏宅	19世紀初期	
18	荻原孜氏宅	19世紀前期	

表2 棟木が一本の棟持柱構造の民家

	家名	建築年代	備考
1	樋田公明氏宅	17世紀末期	間接
2	塚田一作氏宅	17世紀末期	間接
3	竹川篤氏宅	18世紀初期	間接
4	桜井健一氏宅	18世紀初期	間接
5	五味時則氏宅	18世紀前期	間接
6	中島信次氏宅	18世紀中期	直接

4、掘立柱持柱構造からの展開過程

4-1 掘立から礎へ

棟持柱構造は、『山梨県の民家』や仁科神明宮本殿にみられるように柱の脚部が礎の場合もあるが、その祖型は掘立であったろう。根元が地中に埋まる掘立柱は耐久性にかけられるため、柱の脚部に礎を挿入したり建物を短い周期でたてかえたりしたのであろう。掘立の家が礎の家に移行する時期は、地域によって異なるだろうが、近世に入ってもほとんどが掘立の家であったところもあった*46)。そして、礎の家をまず本百姓といった支配者層が採用しはじめたとき、梁行4間といった規模を対象にしていたと考えられる。とはいえ、掘立から礎への移行は、掘立の家をこわした後に、礎の家を新しくたてる場合ばかりではなく、柱の腐朽に伴い、柱の根元に礎を挿入した場合もあった。この場合、もともとすべてが掘立であった柱の脚部が、一つ一つ礎にかわっていく。しかし、掘立柱構造の建物は、その支点が固定端であるかぎり、安定とみなすことができるが、柱の根元が腐朽したり柱の脚部が礎にかわったりした場合、その支点はもはや固定端とはいええず、回転端とみなされる。そして、柱の脚部がすべて回転端になった場合、その構造は不安定になる。つまり、掘立から礎への変容は、一足飛びである他に、漸進的でもある。漸進的である場合、上部の構造に大きな変更が必要ではない。しかし、柱の脚部をすべて掘立から礎にかえると不安定になるから、掘立柱と礎石建が混じる建物にならざるを得ない。そして、柱の脚部をすべて礎としたければ、いままで掘立柱に頼ってきた建物をまるごと更新しなければならないだろう。このとき、柱の脚部が礎になるから、水平材は剛節で垂直材と接合される必要がある。つまり、上屋梁と上屋柱の接合は剛節でなければならない。

ふりかえって棟持柱構造は、永井の指摘の通り、梁行2間ないし4間がその祖型になるだろう。梁行4間の棟持柱構造の家が支配者層の建物と想定されるのに対して、梁行2間の棟持柱構造の家はそうではない人々の建物と想定される。梁行2間となるこの零細な建物は、建築遺構としてほとんど確認されていない*47)。しかし、たとえば室町後期を代表とする草戸千軒の場合、梁行2間を示す柱穴が多数発掘されている*48)。柱穴は掘立柱を示唆する。掘立柱は自立するから上屋梁がなくてもよい架構を示唆する。したがって、草戸千軒の室町後期の遺構面にみられるような梁行2間の柱穴は掘立棟持柱構造を示唆する。これにより、柱の脚部が掘立である梁行2間の棟持柱構造の家々を、民家の原初的な姿のなかの支配的な類型だと仮定することができる。そして、この類型がある時期まで地域によっては幅広く存在していたと見通すことが許される。

このように、掘立の棟持柱構造を梁行4間と梁行2間に大きく

図6 棟木が2つ存在する棟持柱構造の民家

図7 棟木が一つで棟持柱が棟木を直接支える構造の民家

図8 棟木が一つで棟持柱が棟木を直接支えない構造の民家

図9 オダチ組から扱首組へ
変容過程

整理できる。また、棟持柱構造には、掘立の家ばかりではなく、礎の家もあって、ともに棟持柱が棟木を支承していた。のちに棟持柱構造をやめて軸部と小屋組に分離した形になったとき、何が棟木を支承するようになったのか。

4・2 掘立棟持柱構造から軸部と小屋組の分離へ

『山梨県の民家』で提示された棟持柱構造は棟持柱が棟木を支える農家であった。京都の町屋も、礎の上にのる柱が棟木や母屋を直接支えるから、棟持柱構造であった。では逆に、軸部と小屋組に分離した架構の場合、何が棟木を支えるのか。茅葺農家に即して、この点を考察する。

茅葺民家は、矩勾配の屋根を基本とし、軸部と小屋組に分離した形が一般的であって、その小屋組はオダチ組か扱首組に大別され、その棟木は二本のものと一本のものがある。棟木が一本の場合、この棟木を棟持柱が直接支えていた架構(図10)は、その形からしてオダチ組(図11)へ変容したと想定するのが妥当であろう。このとき、棟木を支える垂直材は地面からたちあがる棟持柱から上屋梁の上にのるオダチへとかわったと想定される。他方、この棟木を棟持柱が間接的に支えていた架構(図12)は、棟東をもつ扱首組(図13)に変容したと想定される。すなわち、棟持柱が二本の扱首の交叉部を介して棟木を支えていた架構の場合、建物は軸部と小屋組に分離した結果、一本の上屋梁と二本の扱首から成る二等辺三角形がトラスを形づくるとともに、この三角形の垂線の位置に棟東があった。この棟東は小屋組のなかに棟持柱構造の名残をとどめたものといえる^{*49)}。

加えて、一本の棟木を棟持柱が直接支えた架構はオダチ組へ変容し得るとしても、オダチ組が扱首組に変容するのはかなりむずかしいといえる。『京都府の民家』の第二冊と第四冊は、オダチと扱首が混じる架構の具体例を紹介し^{*50)}、オダチ組から扱首組

への変容過程も示す(図9)^{*51)}。この変容過程において、オダチ組(Aタイプ)は棟木が二本ある架構を経て扱首組(Dタイプ)に移行し、BタイプとCタイプが「過渡的な形式」とされる。しかし、この場合、AタイプからDタイプへ移るには、棟木が二本あるBタイプおよびオダチと扱首の柱筋が異なるCタイプを経なければならない。これらの点からして、オダチ組から扱首組への移行は容易でない。逆に、二本の扱首の交叉部を介して一本の棟木を棟持柱が間接的に支える形(図12)は、棟木を棟持柱が直接支える形(図10)よりも、はるかにたやすく棟東のない扱首組(静定トラス)へ移行し得る。すなわち、この架構の場合、軸部と小屋組に分離したときに、かつての棟持柱を上屋梁にのる棟東として扱首組のなかに移し(図13)、さらにその棟東を小屋組のなかから取り去ることも可能なので、静定トラスの扱首組(図9Dタイプ)へ容易に移行できる。

対して、棟木を棟持柱が直接支える場合(図10)、軸部と小屋組に分離すれば、オダチ組へ容易に移行できる(図11、図9Aタイプ)。しかし、オダチ組から静定トラスへの移行は、BタイプとCタイプのようなオダチに扱首が混じる過渡的な小屋組を介さなければならないので、むずかしい。この「過渡的な形式」がとりわけオダチ組の先進地域で多くみられたのである。

4・3 掘立棟持柱構造からの展開

本論は、棟持柱構造を祖型とする見方が民家に対してひろく妥当する可能性を示してきた。このとき、棟持柱構造を祖型とする民家の展開過程を想定すると、以下になろう。

第一、梁行2間の掘立柱構造で中柱が棟木を支えるものが支配的であった。第二、掘立柱構造が礎石建へ移行する姿には二通りあった。掘立の家から礎の家へと建物をまるごとたてかえるドラスティックな変容、および柱の脚部をひとつひとつ掘立から礎にかえていく漸進的な変容である。後者の場合、掘立の柱に礎の柱が徐々に混じる形になる。第三に、民家は、中世から近世にかけて、柱の脚部をすべて礎とする建物へたてかえられていった。第四、掘立柱構造の古い建物をこわして礎石建の新しい建物をたてる場合、建物の規模の拡大がなされる場合となされない場合がある。第五、建物には棟木が二本のものと一本のものがあった。棟木が一本の場合、棟木の支え方には二通りあった。棟持柱が棟木を直接支えていた架構(図10)はその後オダチ組へと展開していった(図11)と想定される。二本の扱首の交叉部を介して棟木を棟持柱が間接的に支えていた架構(図12)はその後、棟東をもつ扱首組(図13)へと展開していったと想定される。

5、農家と町屋—ウダツがあがらない—

5・1 農家のウダツ

オダチはウダツの転訛であった。ウダツは、上屋梁にのる棟東ないし棟持柱そのもので、棟木を支える垂直材であった。このウダツがあがる、あるいは、あがらない、とはどういう意味であったか。従来もっぱら屋根の妻壁の上にみえる屋境に即してこのことが説明されてきた。しかし、ウダツは原初的には棟木を支える材を指すから、この説明は語源に基づいていない^{*52)}。

ウダツが原初的に棟木を支える材であるならば、ウダツがあがるとは、棟木を支えていた材が、掘立の棟持柱であった状態(図10・図12)から、上屋梁にのったオダチないし棟東(図11・図13)

図10 棟持柱をもつ小屋組
の模式図 (のちにオダチ組へ移行)

図11 礎石建への移行後の
オダチ組の模式図

図12 棟持柱をもつ小屋組の模式図
(のちに扱首組へ移行)

図13 礎石建への移行後の扱首組
の模式図1

図10～図13の凡例 点線：垂木・扱首、シングルライン：オダチ・棟東・梁、ダブルライン：柱、長方形(柱下)：礎石、白丸：棟木・桁

へ移行することを意味していたのではないか。すなわち、地面から棟木を直接支えていた姿から、上屋梁にのって棟木を支える姿へ移行したことを、このことは意味していたのではないか。

梁行2間の掘立棟持柱構造は、考古学的発掘で発見されたり絵画資料に散見されたりするものの、安曇村の山中の鈴蘭小屋付近の畑中で石原が実見した「又小屋」をその実例にあげることができるくらいである^{*53)}。これからして、梁行2間の掘立棟持柱構造は、すこぶる耐久性に欠ける残りにくい建物で、時代が下れば住宅としても使われなくなっていたといえる。この種の零細で粗末な建物は、中世後期から近世にかけて、礎石建となって、規模が拡大し、その大半は軸部と小屋組が分離した形になった。この想定に基づけば、棟木を支える材は、地面からたちあがる棟持柱から上屋梁の上にある垂直材に移動しているから、このときウダツは確実にあがっている。対して、梁行2間の掘立柱構造のままでは、その中柱も地面からたちあがる棟持柱のままなので、棟木を支える材は上屋梁の上には決してあがることできない。ウダツがあがらないとはこの状態を指していたのではないか。

石原憲治は、ウダツヤが人前ではあまり口にしないような下等な建物を意味していたという点を記録している^{*54)}。ウダツがあがるという表現に前向きの意味あいが含まれていた点からすると、石原の指摘は意外な感じがする。しかし、ウダツヤが梁行2間の妻壁を支える三本の掘立柱のうち、その中柱が棟木を支えていた小規模建造物だとするならば、ウダツを口にも出すことができなかつた心情を察することができる。ウダツは掘立の棟持柱のままであるかぎり、耐久性にける粗末で小さい建物を意味した。このかぎりにおいて、ウダツは建築的にも社会的にもあがらない。対して、掘立から礎へ移り、規模が拡大し、軸部と小屋組に分かれた結果、ウダツが上屋梁の上にあるならば、それはまさに文字通りウダツがあがるという状態を指していたであろう。

5-2 町屋のウダツ

では、草屋根より緩勾配となる板屋根から展開した町屋のうち、とくに京都の町屋に即してウダツを考察する。先述のごとく、室町時代にウダツは町屋においても棟持柱そのものを指していたと考えられる。しかし、近世に入ると、町屋の場合、ウダツは棟持柱といった棟木を支える材よりむしろ屋根の妻面にみえる屋境として解釈された。その歴史的背景をここで考察する。

まず、京都の町屋に関して、以下の4点を確認したい。16世紀の洛中洛外図屏風と17世紀の洛中洛外図屏風を比較したとき、明らかに異なる形が町屋の外観にみられる。第一、16世紀の屏風では町屋の屋根に屋境としてのウダツがあったりなかったりする。対して、17世紀の屏風ではそこに屋境としてのウダツがかならずある。第二、16世紀の屏風では町屋の外壁は真壁になっていて柱がみえる。対して、17世紀の屏風では町屋の外壁は大壁になっていて柱がみえない。第三、16世紀の屏風では町屋の妻面は3本の柱から成る梁行2間である。そのうち中柱は地面から棟木を直接支えている。対して、17世紀の屏風では柱がみえないものの、田中吉太郎家文書などから推して、妻面の柱は棟木ないし母屋を地面から直接支えている^{*55)}。第四、16世紀の屏風では、柱の脚部に礎がみられないので、掘立と想定できる。また、考古学的発掘資料から推しても、当該期の町屋は掘立柱構造であったと推断さ

れる^{*56)}。対して、17世紀の屏風から町屋の柱の脚部が何であるかは判定できない。しかし、京都の町屋はその遺構が礎石建であるから、掘立から礎へある時期に移行したといえる。

以上を通じて注目すべき事柄は、京都の町屋が、礎石建になったものの、軸部と小屋組に分離することなく、棟持柱構造のままであった点である。近世京都の町屋のこの姿は、『山梨県の民家』に似るが、軸部と小屋組に分離した形の近世民家と異なる。京都の町屋の場合、近世に入ってから外壁が真壁から大壁にかわった点に構造的な解決があったのではないか。すなわち、柱の脚部が掘立から礎にかわれば不安定な構造にならざるを得ないが、外壁を大壁にすればその壁は耐力壁とみなされるから構造上の弱点は解消される。

くわえて京都の町屋の場合、以下の背景を考慮したい。京都では、天正19年(1591)9月の洛中地子免許を経て、その中心域・洛中から寺社本所といった旧来の都市領主が排除された。その結果、町屋の持主は都市領主を介することなく公権力に直接支配されることになったが、逆に一個の家持として旧来の領主的支配から放たれた町人身分に位置づけられた。17世紀の洛中洛外図屏風がごとく屋境としてのウダツを町屋の屋根の上に描くのは、洛中地子免許をへて析出された町人身分たる家持層を建築形態として表徴するためであったろう^{*57)}。このとき、屋根の上にある一対のウダツは町人足役(後の軒役)を負担する家を表すことになる^{*58)}。この家に一人の家持がいた。

すなわち、洛中地子免許を介して析出された町人という身分は、屋根の妻面にのる屋境をその自立の証として表徴していた。軸部と小屋組に分かれていない京都の町屋の場合、このことが、とりわけ天正19年を下る近世において、「ウダツがあがる」ことに含まれた前向きの意味あいになっていった、と考えられる。

5-3 ウダツの源流と展開

以上、農家と町屋についてウダツを考察した。ウダツは原初的には棟木を支える材を意味していたから、農家の場合、茅葺農家に即していえば、この材が地面から上屋梁の上にあがること「ウダツがあがる」ことのそもそもの意味ではなかったか。このとき、柱の脚部が掘立から礎になり、多くはその内部が軸部と小屋組に分離した。建物をこのように替えることができたのは力のある人々であったろうから、「ウダツがあがる」とは恐らく社会的に地位が高いことを意味した。これとは逆に掘立の棟持柱構造のままであり続けざるを得ないことは「ウダツがあがらない」という状態を示していた。対して町屋の場合、ウダツは屋根の妻壁の上にある屋境との意味が強い。このウダツが、京都の場合、17世紀になると、各家にことごとく見られるようになる。この変化は、京都の町屋の家持が、町人という身分を得たことによるとともに、町人足役(後の軒役)の負担者としても公儀から確定されたことによる。身分制が確立された近世に入り、都市が農村から区別された結果、都市においてウダツは、棟木を支える材という意味から派生して、屋境という意味に移っていった。屋境としてのウダツは公儀が定めるに至った個々の町人身分を形として外に表した。特に隣家と壁を共有する棟割長屋^{*59)}のなかの個々の家持を外に示した。と同時に、このウダツの一対が町人足役(後の軒役)を個々の家持に対して棟別で賦課する上での最小単位を表した^{*60)}。

6、総括

民家の祖型に棟持柱構造を想定した本論は、その論点が中世後期から近世にかけてのわが国に対して広く妥当することを検証してきた。とりわけ掘立の棟持柱をもつ建物には梁行2間と梁行4間が想定された。梁行4間のものは、支配者層の建物と想定され、後に礎石建へと移行し、多くの場合、軸部と小屋組に分離した。この場合、棟木を支えていた材は小屋組の中にオダチないし棟束として残った。このとき、地面から棟木を支えていた材が上屋梁の上にのるので、ウダツはあがったといえる。

梁行2間のものは、支配者層以外の人々の家で、数の上では多くを占めており、そのうち近世にはいっても梁行2間で掘立の棟持柱構造のままのものもみられた。その第一の例は小住宅としてのウダツヤである。これは、さらに時代が下れば人があまり口にしない下等な建物を意味したが、中世後期には無数にみられた形ではなかったか。その第二の例は、中世後期京都の町屋である。梁行2間の掘立棟持柱構造であったこの建物は、後に掘立柱構造から脱皮し、礎石建の棟持柱構造となったが、大壁となった妻壁が耐力壁として機能した。この壁が隣家との境にあった。その中に棟持柱があった。その壁が屋根の上にたちあがることで、屋境が外からでもみえるようになった。町人身分とその身分に対する賦課が確定された16世紀末以降、その屋根の妻壁の上に出た屋境をウダツと捉え、それが外からみえることが「ウダツがあがる」と解釈された。すなわち、京都の町屋の家持層は、洛中地子免許を介して、直轄支配を受ける公儀に対して町人足役を直接負担するようになったものの、旧来の都市領主からの支配を離れた家持として自立した。

7、総論

以上にみた展開過程において、農家も町屋もともにその大半は梁行2間の掘立棟持柱構造から出発していた。ゆえに、農家と町屋ともに、遡れば、その多くは柱の脚部が掘立で中柱が棟木を地面から直接支える梁行2間を原型にしていた。すなわち、梁行2間の掘立棟持柱構造は日本の民家の支配的な源流である。

参考文献・引用および註

- 1) 京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家 調査報告第七冊一昭和48年度京都府民家緊急調査報告一』（京都府教育委員会、1975年）
- 2) 畑智弥・土本俊和「京都の町屋における軸部と小屋組」（『日本建築学会計画系論文集』513、259-266頁、1998年）
- 3) 遠藤由樹・土本俊和・吉澤政己・和田勝・西山マルセロー・笹川明「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」（『日本建築学会計画系論文集』532、2000年6月掲載予定）
- 4) 彰国社編『建築大辞典 第2版＜普及版＞』（彰国社、1993年）1623-1624頁引用
- 5) 『邦訳 日葡辞書』（岩波書店、1980年）432頁引用
- 6) 日本建築学会民家語彙集編纂部会編『日本民家語彙解説辞典』（日本アソシエーツ、1993年）727頁引用
- 7) 「江戸名所図屏風」＜左隻第4層＞（『国史大辞典 第七巻』吉川弘文館、1986年、1図）の建設中の町屋、および安政2年（1855）・瓦版「江戸大地震出火次第」（『国史大辞典 第二巻』同、1980年、328頁／前掲『国史大辞典 第七巻』7図）の倒壊していない建物に棟持柱がみえる。
- 8) 笠松宏至・佐藤進一・百瀬今朝雄「中世政治社会思想 下」（岩波書店、1981年）240頁引用。伊藤裕久「中世集落の空間構造一惣的結合と住居集合の歴史的展開一」（生活史研究所、1992年）39頁および伊藤郷爾「中世住居史【第2版】」（東京大学出版会、1958年）134頁参照。
- 9) 川島宙次「滅びゆく民家一閑取り・構造・内部一」（主婦と生活社、1973年）102頁引用
- 10) 石原淑治『日本農民建築の研究』（南洋堂書店、1976年）52頁引用
- 11) 註10前掲『日本農民建築の研究』52-54頁引用
- 12) 註4前掲『建築大辞典』128頁引用
- 13) 長野県『長野県史 近世資料編 第三巻 南信地方』（長野県史刊会、1975年）497-498頁参照
- 14) 石原淑治『日本農民建築 第五輯（北陸、中部Ⅰ）』（南洋堂書店、1973

- 年）194頁引用
- 15) 註4前掲『建築大辞典』128頁引用。なお、『鼠の夜嘶』は日本経済叢書刊行会編纂『通俗経済文庫巻十』（同会発行、313-318頁、1917年）所収。
- 16) 柳田国男・山口貞夫「居住習俗語彙」（国書刊行会、1975年）86頁引用
- 17) 註4前掲『建築大辞典』207頁引用
- 18) 9前掲・川島「滅びゆく民家」102頁
- 19) 『飯山市誌 歴史編 上』（飯山市、1993年）吉澤政己分巻・811-822頁参照
- 20) 註4前掲『建築大辞典』1007頁引用
- 21) 註6前掲『日本民家語彙解説辞典』727頁引用
- 22) 宮沢智士『日本列島民家史 技術の発達と地方色の成立』（住まいの図書館出版局、1989年）26-34頁参照
- 23) 「東筑摩郡では一名をケミヤといひ、外に在つて別棟をなすものを衰のケミヤ、家の一区画をなすものを表のケミヤといふ者もあつて、共に今では物置としか解せられて居ない」（註6前掲『居住習俗語彙』44頁引用）。
- 24) 註14前掲・石原『日本農民建築 第五輯』192-196頁参照
- 25) 註6前掲『居住習俗語彙』275頁引用
- 26) 『古辞類苑普及版 居處部』（吉川弘文館、1984年）971頁、岩本由輝「税と沽券」（『家・屋敷地と霊・呪術 シリーズ比較家族6』）早稲田大学出版部、118-123頁、1996年）、太田博太郎「「うだち」について」（太田博太郎『日本建築の特質 日本建築史論集Ⅰ』岩波書店、461-472頁、1983年）参照。なお、太田は「京（ウダチ）構造と又首構造とが、もとは別の系統であったと推測し」、杜寺建築を大別し、「寺院建築や民家は本来又首構造であった」推定している（太田『同』471頁）。本論の立場からすると、民家の場合、両者は棟持柱構造として同系統であると推測できる。
- 27) 註10前掲・石原『日本農民建築の研究』52頁引用
- 28) 註10前掲・石原『日本農民建築の研究』54頁引用
- 29) 『風土記 日本古典文学大系2』（岩波書店、1958年）54-57頁参照
- 30) 註26前掲・岩本「税と沽券」参照。なお、岩本は「建築部材としての税と構造体としての税とは別のものという判断を下すことはできないのではなからうか」（岩本「同」122頁）としており、本論も同感である。
- 31) たとえば『日本民俗大事典』（吉川弘文館、1999年）168頁参照
- 32) 註8前掲・伊藤『中世住居史【第二版】』199-200頁引用。なおこの論点は、「ウダツをあげた中世の町屋」（伊藤ていじ『民家は生きていた』美術出版社、219-220頁、1963年）に受け継がれている。
- 33) 註5前掲『邦訳 日葡辞書』264頁
- 34) 註5前掲『邦訳 日葡辞書』349頁
- 35) 宮澤智士「近世民家の地域的特色」（永原慶二・山口啓二『講座・日本技術の社会史 第七巻 建築』日本評論社、151-182頁、1983年）
- 36) 藤島亥治郎「江戸時代民家の文獻的研究一特に信濃佐久の民家について」（『建築史研究』14、12-26頁、1954年）
- 37) 註35前掲・宮澤「近世民家の地域的特色」155頁参照
- 38) 武蔵泊他『大学課程 建築構造力学』（オーム社、1978年）49-51頁参照
- 39) 註8前掲・伊藤『中世住居史【第二版】』192頁・第42図参照
- 40) 註8前掲・伊藤『中世住居史【第二版】』191頁引用
- 41) 宮澤智士編『日本の民家 第二巻 農家Ⅱ』（学習研究社、1980年）180-183頁、重要文化財江川家住宅修理委員会編纂『重要文化財江川家住宅修理工事報告書』（重要文化財江川家住宅修理委員会、1963年）参照。
- 42) 註5前掲『邦訳 日葡辞書』264頁引用
- 43) 太田博太郎分巻「仁科神明宮本殿 同中門」（長野県『長野県史 美術建築資料編 全一巻（二） 建築』長野県史刊行会、106-107頁、1990年）
- 44) 山梨県教育委員会編纂・関口欣也執筆『山梨県の民家』（山梨県教育委員会、1982年）
- 45) 註3前掲・遠藤他「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」にて述べた。
- 46) 竹内治利「承応家別人別帳からみた佐久地方」（『信濃』III-3-5、309-316頁、1951年）、註35前掲・藤島「江戸時代民家の文獻的研究」、羽柴直人「岩手県平泉町における近世掘立柱民家について一泉屋遺跡、志羅山遺跡の事例を中心に」（『岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 紀要』17、41-60頁、1997年）等を参照した。
- 47) たとえば、前掲14・石原淑治『日本農民建築 第五輯』196頁にて、石原が実見した丸太の掘立の棟持柱をもつ建物が記録されている。
- 48) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡調査報告Ⅴ一中世瀬戸内の集落遺跡一』（広島考古学研究会、1996年）参照。なお、この点など岩本正二氏から直接御教示を受ける機会を得た。
- 49) 註3前掲・遠藤他「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」
- 50) 京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家 調査報告 第二冊』（京都府教育委員会、1968年）35-40頁および『京都府の民家 調査報告 第四冊』（京都府教育委員会、1968年）30頁参照。
- 51) 註50前掲『京都府の民家 調査報告 第二冊』40頁・挿図13引用
- 52) 語源に即さないウダツの研究は三田克彦「卯建の起源とその変遷に就て」（『東洋建築』2-2、105-111頁、1938年）から見える。
- 53) 前掲14・石原『日本農民建築 第五輯』196頁
- 54) 前掲14・石原『日本農民建築 第五輯』194頁参照。
- 55) 註2前掲・畑他「京都の町屋における軸部と小屋組」にてすでに述べた。
- 56) たとえば近江八幡城下町では、「為心町地先で、天正期の掘立柱建物の一部と想定される柱穴列が町割りの現地割りに平行して検出された」（岩崎直也「八幡城の空間構成」『日本歴史』557、102-110頁、1994年）110頁引用。また、松本城下町の伊勢町では、「第5検出面の遺構（17世紀前半）」で「掘立柱建物址1」が検出され、「第6検出面の以降（16世紀末）」でも「掘立柱建物址1（柱穴4）」が検出され、その「建物址のP2には、柱材がそのままだと存していた」（松本市教育委員会「松本市文化財調査報告」No.129、1997年）6-7頁引用。
- 57) 土本俊和「近世京都にみる「町なみ」生成の歴史的前提」（『日本建築学会計画系論文集』479、207-215頁、1996年）
- 58) 土本俊和「地子と地租の関一近世京都の賦課形態における町人足役の位置一」（『建築史学』33、110-134頁、1999年）
- 59) 土本俊和「織豊期京都の小屋と町屋一棟割長屋を原型とする短冊形地割の形成過程一」（『建築史学』31、83-112頁、1998年）を参照されたい。
- 60) 土本俊和「洛中地子豁免と町屋一建物先行型による短冊形地割の形成過程一」（『建築史学』27、47-75頁、1996年）にて指摘した。

（2000年1月24日原稿受理、2000年4月4日採用決定）